

令和3年7月1日

敬愛短大附属幼稚園だより 7月号

小運動会も終わり、子どもたちはお友だちとプールを楽しんでいます。プールが始まる前は砂場での泥んこ遊びに夢中になり、次の学年の子どもたちが泥んこ遊びを興味深げに覗き込みながらまだかまだかと待ち焦がれていました。また、泥んこ遊びが始まって最初の内はそれぞれが何をしようかと情報を集めていましたが、その後は本領を発揮してお尻を泥んこの中にどっぷりと浸らせたり、寝転んだりと存分に遊びを楽しんでいました。その様子は幼稚園のホームページ「幼稚園の生活」からスペシャルコレクションを選択してご覧ください。

園内では、季節の進行が速いせいか、初夏に咲くクチナシの花もあつという間に満開となり、園内に良い香りを漂わせてくれました。また、子どもたちはじゃがいも掘りを楽しみ、園内にある良く実ったビワを味わいました。

【進む学力の二極化と幼少期の読書の関係】—キーワードは知的な好奇心—

近年の大学生の大きな問題となっているものに文章の意味を読み取れないというのがあります。幼児期は絵本に触れる機会も多く、保護者の方や幼稚園の先生の読み語りで、物語の背景や登場人物や動物の気持ちなどについて想像したりする機会が多くあります。また、小中学校では朝読書の習慣がついて読書の機会も多いのですが、高校生になると途端に読書量が極端に減少しています。もちろん高校でも図書館を活用して良く読書をしている生徒もいるのですが、自分で読書をするという意思を持たない限り図書館に行くようにはなりません。高校生活で学校図書館に行ったことがほとんどないという高校生が非常に多くなっています。その結果として、文字が読めない、意味が分からないということで、知識も身につかず、成長しても学力が伸びないというサイクルに入り込みます。極端な場合では、試験問題の質問の意味がわからないということすらあります。

多くの子は2歳くらいになると言葉を覚えて話し始めますが、初めの頃はあまり差がなくても、その後、知的な好奇心が強い子どもたちは、様々なジャンルの本を読みはじめるようになります。そしてこの頃から、更に知識や読解力を身につけて自分の世界を広げていく子と、知的な好奇心が乏しく、本を読むことなく、外で遊ばずにスマホばかりいじり、知識も読解力も乏しく、狭い世界に閉じこもっている子に分かれていくこととなります。（既に幼少期に始まっている二極化傾向）

元々知的な好奇心が旺盛で、本をよく読み、読解力が身につけている子は、学校での国語の時間に実用文の読み方などを改めて学ぶ必要はありません。

語彙力の差はすでに幼児期から始まっており、そのまま小学校～大学の学びの中で、国語の時間に文学作品や小説・論評を読んでも（読まない）文字にならない背景や人の心情などは到底想像することもできず、実用文以外は文字や文章に触れることもないので、教養も身につくこともありません。

近年では、学校によっては授業で文学作品など扱える状況ではなく、そんなものを読ませても無意味としか言えないといった状況も出てきているようです。

語彙力は小学校での学力に影響するというデータや、小学校入学時の語彙力の差は6年生になっても縮まっていないといったデータもあります。更に、言語環境に恵まれている子とそうでない子では、小学校に入学するまでに語彙数に1万5000語もの差が出るというデータすらあるくらいです。このようなことを聞いてしまうと早期教育を考える人もいるわけですが、幼児期に勉強をさせる幼稚園に通った子より、のびのび遊ばせる幼稚園に通った子の方が語彙力が高いというデータが出ています。（敬愛幼稚園は後者の方です）

このようなことから分かるように、幼児期には遊びを通して学ぶこともたくさんあるので、出来るだけ多くの体験をさせ、その中で語彙を豊かにしながら言語活動を進めて行くことがとても大切です。

こうしたことから、敬愛幼稚園では、現在取り組んでいる研究が終了する2023年度からは“ことばの泉づくりプロジェクト”について本格的に取り組む、研究を更に深めて行く予定です。

（園長 杉山清志）